

ダーバン世界会議：IMADRワークショップ報告と門地差別をめぐる攻防

人身売買撤廃ワークショップ報告

反差別国際運動事務局長・武者小路公秀

2001年8月28、29日、ダーバンでの反人種主義・差別撤廃 NGO フォーラムの一環として「アフリカにおける搾取的移住を防止する人間の安全保障～とくに人身売買を中心に」ワークショップが、反差別国際運動とカナダの NGO、オルタナティブズの共催によって開催された。

正確に言えば、8月28日午後3時から5時にかけてフォーラムの公開ワークショップが開かれ、29日は午前9時から午後6時まで、非公開の企画会議が開かれた。企画会議は、国連人権高等弁務官事務所、ILOなどの国連機関、IOM（国際移住機構）の協力を得て、ワークショップと同テーマの国際プロジェクトを企画するために、前日の NGO フォーラムでの公開討論を参考にする討論が行われ、このプロジェクトの大筋の流れについての合意に達することができた。

公開ワークショップでは、アフリカでの人身売買の現状、人身売買の主な受け入れ地域の欧州の現状、国連関係機関および NGO 関係者が被害者を力づけるために現在進めている諸活動についての報告がなされ、100名ほどの参加者の間で活発な討論が行われた。

企画会議では、上記のアフリカと欧州との間の搾取的移住の現状が、さらにアジア、中東、東欧、米州とも密接につながる犯罪組織のネットワークによって進められていること、これに対する関係諸国政府の対策が不十分であるばかりでなく、被害者を犯罪者扱いしていることが確認され、とくに「人間の安全保障」の立場からの国際的対応の具体的な立て方が討論された。

公開のワークショップ、非公開企画会議を通じて、次の点が確認された。

1. アフリカにおける人身売買は、紛争、貧困、環境破壊、エイズなどの人間的不安材料と不可分の形でアフリカ諸国の間で盛んに行われ、その流れが西欧のみならず、世界諸地域に広がっている。
2. 西欧ではある程度の対策が政府レベル、NGO レベルで進められているが、ばらばらな上、アフリカ送り出し諸国の現状への認識が不足している。
3. 国際犯罪組織はナイジェリア、ケニアなどを中心として、西欧、アジア、アメリカの犯罪組織と密接に連携して、搾取的移住により巨利を得、これを武器貿易その他の資金源にしている。

そこで、企画会議の結論としては、以上の実状についての情報の共有、共同の調査研究、NGO ネットワーク間のネットワークの構築、被害者を理解し、力づける市民社会や政府当局関係者の意識を高めることの緊急性が確認された。そしてこれらの問題をアフリカの実状を知る NGO、国連機関、研究者などを中心にした、第2回ワークショップをアフリカで開催すること、これを組織するためのインターネットによる対話を進めることが決定された。

マイノリティ女性に対する複合差別ワークショップ:「マイノリティ女性にとっての暴力」の概念の再考

反差別国際運動日本委員会・熊本理抄

主催：反差別国際運動日本委員会（IMADR-JC）

日時：2001年8月30日午後1時～5時

【目的】 国際的にも「女性に対する暴力」を撤廃するための取り組みは、とりわけ1995年の北京女性会議以降の運動が追い風となって大きな関心を集めている。しかし、「女性に対する暴力」といったとき、多数派の女性たち、とりわけ先進国の女性たちは、自らの受ける性差別には敏感であっても、自らが加担する側、抑圧する側にもなりうる人種差別については、また、人種主義・人種差別ゆえにマイノリティ女性たちが被る複合的な形態の暴力については無関心でありつづけた。

男性の経験が優先的に扱われてきた人種主義・人種差別に反対するさまざまな取り組みの中では、マイノリティ女性に対する視点は完全に欠落していた。それぞれの集団に属する男性が、自らが受けるマイノリティとしての差別には敏感であっても、実は女性差別を内包してきた。そしてまたマイノリティ女性同士も他のグループの実態を知っているわけではない。

私たちマイノリティ女性に覆い被さるさまざまな形態の暴力の共通の根源である家父長制や宗教的不寛容、人種差別的・性差別的な法制度や文化、植民地支配、南北の経済格差などを構造的に分析していく必要がある。また、その構造の中で、教育、労働、経済、文化などにおいて、マイノリティ女性が受けるさまざまな不利益と暴力のつながりを見出し、なくしていくための取り組みを、マイノリティ女性に対する暴力撤廃という共通の目標のために国境を越えた連帯によって進めていかなければならない。

このワークショップの成果を持ち帰り、2005年の北京+10をひとつの目標としつつ、国内外のマイノリティグループの女性同士のネットワーク活動とともに、多数派女性やマイノリティ男性への問題提起を行う中で、「真の」連帯の一步を築いていきたいと考える。

開会挨拶：ニマルカ・フェルナンド（IMADR）

- ・ 政府・国家のポジションを討議する会議のため、NGOの活動が重要な鍵になる。ネットワーキングによる強化が必要。
- ・ 人種差別とそれぞれが違う形で複合的に重なり合う複合差別も大きな議題になっているが、「カースト」や「人種」など差別や人種主義の再定義が求められている。
- ・ 北京会議 北京+5 WCAR とこれは始まりではなく一連の続きの中にある。

南アフリカの黒人女性からのアピール：マンディサ・モナカリ（Ilitha Labanthu "Light to the People"）

- ・ Ilitha Labanthu という草の根の、女性・子どもの問題に取り組む組織からきた。アパルトヘイト

はなくなったが、歴史的レイシズムがまだまだ残っている。デクラーク政権時から変化が起こり、人々の誇り、国家の再建などが始まったが、資源へのアクセスがどんどん廃止されていくなど、女性の犠牲化、貧困化が進んでいる。支配層は経済レベルに拠ってしまう。

- ・ 私たちが抱えている問題は、永遠にとっても重要で民主主義の戦いは克服していかなければならない。
- ・ 女性の人権と人権はイコールではない。女性の人権を人権にすることが国の発展。女性がイエスというまで、変化があるべき。
- ・ アパルトヘイト時代へまた戻っている。「女性は家へ」という差別的な立場が強まっている。機会へのアクセスなど、地方の女性は特にどこからスタートしてよいか分からないでいる。
- ・ 失業、母子家庭などの問題により、自立・自律のためのニーズを認識することにさえ欠け、コミュニティによる連帯が奪われる。
- ・ 暴力：南アの文化では単親は受け入れがたく、暴力へとつながる。南アでは暴力が非常に多いが、そうした事実は公的に否定され、犠牲者の女性も含め、事実についてあまり話さない。
- ・ 居住：スラム、バラックなど、抑圧が女性に向けられる。女性は家のことに優先順位を置かなくてはならない。
- ・ 健康：女性には危険な問題である。高血圧や乳がんが多く、とりわけ HIV/AIDS は南アの病魔と言われている。寿命統計によると、HIV/AIDS = 黒人女性としか出ていない。
- ・ 教育：まだまだギャップがある。いくら民主国家といっても、女性にとってのアパルトヘイトを廃止するのはまだ不可能な状態にある。
- ・ アファーマティブ・アクション：ほかのカラードから不平・不満が出ている、ほかのカラードの失業が増加しているからだ。女性は排除されるから女性にはそもそもドアさえ開けられない。女性の期待が破壊される。法があっても実施が大変。水、電気、都市へのアクセスなど、彼女たちのニーズが満たされる必要がある。
- ・ 政治参加：50%の議員は女性で、厚生、国土、鉱業、公共事業、外相は女性。アパルトヘイトでは、女性組織を排除してきたが、今は認めている。しかし、もともと女性が参加することが好ましいとは思われなかった。男性による政治・権力ゲームに振り回されず、どうやって社会全体に影響を与えるかの政治のゲームを女性が作っていくことが必要。
- ・ ポストアパルトヘイトで、草の根で直接運動を行っていきけるような組織が作れるようになった。暴力という身体的・精神的な抑圧に対して、私たちのような組織が生まれることが「癒し」の作業でもある。

ダリット女性からのアピール：ブルナド・ファティマ（タミル・ナドゥ女性フォーラム）

- ・ ダリット女性が解放運動を進める中で痛みや暴力に苦しんでいる。ただ、それがレポートされない。家がどれだけ焼かれたか、村がどれだけ破壊されたか、女性が何人暴行されているのか。隠された過去、プライベートな過去を共有していくことが必要だ。
- ・ 男が逃げ、女・子どもが残り、ターゲットになる。家は破壊され、さらに夫が殺されたりして、女性の苦しみが増す。
- ・ ナイフなどを持って家に突然乗り込んでくる。料理中に入ってきて胃を蹴られ、殺害された女性、ほかのコミュニティに殺された女性、不当に逮捕され、遺体として帰ってきた女性、幼い少女へのレイプなどが深刻化している。
- ・ 生活基盤が弱い中で、男性から女性への暴力が増す形になる。これは他のカーストにも共通してい

る。

- NGOでも、国の機関でも、女性問題を話しあうときに、Untouchabilityとしてダリット女性が排除される。ダリット問題を取り上げるべきだ。
- サリーが汚れたダリット女性を他カーストがロープでつかんだり、人の食べるものでない食べ物を渡したりする高カーストの抑圧のパワー、支配、それを是認する宗教に苦しんでいる。
- 私たちは、支配、権力に属するべきではない。ダリット女性のエンパワメントの必要性。
- ダリットの男性はカースト問題をあげるが女性の問題はとりあげない。男の問題は男だけ。ダリット男性によるダリット女性へのレイプも大きな問題だ。
- グローバル化：農家の中でも特にダリットに影響をもたらしている。78%が電気なし、90%が衛生なし。女性は家事労働に従事している。
- 1990年にダリット女性の運動が大きくなってくると、高カーストが私たちの運動を許容することができなくなってきた。現在は調査をしながら、大きな公聴会を開催したりしている。国内レベルと国際レベルでの活動の必要性。国連に声をあげていこう！すべてのマイノリティ女性の平等を勝ち取ろう。

スリランカ女性からの証言：サロジャ・シバチャンドラン(Center for Women and Development)

- 私はジャフナという紛争地域からきた。18年ほど戦いが続いている。紛争はただ「民族間の」紛争としか説明されない。ニュースでもそうだ。マジョリティであるシンハラとマイノリティであるタミルの紛争だとされているが、国家や軍隊が戦っているのである。さまざまなかつ特別な解決策を見出していかなければならない。スリランカ政府はいつも「平和のための戦争」という唯一の国家。
- 交渉プロセスは進んでいるが、その間でも女性は暴行を受け、経済状況は悪くなる。マイノリティであるタミルはレイプなどを受ける。暴力には、搾取や文化的暴力などがあるが、国際人権諸条約では、レイプや虐殺などの関係性が見えなくなってしまう。
- 紛争下の女性は、国内避難民、難民などのカテゴリーにひとくくりに入れられる。けがや移住の問題、そこでおきるさまざまな問題もある。これらはすべて戦争によるものだが、それぞれの問題がばらばらにされる。
- 大きな襲撃があったときに一番多くの攻撃があったのはジャフナのタミルコミュニティだ。たとえば、1996年、クリシャンティで虐殺が行われ、国際社会に訴えられた。しかし、政府には大きいものではなかった。私たちは抗議活動を行った。誰だか見分けがつかなくなってしまうほど、ひどいレイプを受ける。警察によるレイプ、避難民生活中のレイプも起きている。紛争下では女性は権利を訴えることもできず、ある役割を背負わされてしまう。
- 緊急な、法制度を含むテロリズム対策が必要だ。ジャフナでは多くのものが逮捕されている。私たちもいつ逮捕されるか分からない。
- 教育も経済力もない。政府は何もしてくれない。くさったものを食べたりしているので、子どもに大きな影響を与えている。薬もなく、シャワーもない。
- ココナツの木から繊維を作ったりしていたが、身を守るためにすべて切られてしまい、農業がなにもできない。女性の仕事がない。地雷は毎日1~2人が被害にあっている。政府は地雷除去のために何もしない。
- この条件下で、私たちに必要なのは連帯。連帯により政府にプレッシャーを与えたい。政府からは

何もいらないのでとにかく戦争をやめてほしい。

- 日々の状況に加えて戦争があるとどうなるのか。リプロダクティブ・ライツは？ 国際人権基準を批准しても、その後、また現実になんてなっているのかが重要で、行方不明にされている人がいたり、女性は連れ合いをなくすことでさらに暴力を受けている。私たちは協力しなければならない。

部落女性からのアピール：坂根政代（部落解放同盟）

- 昨日南アの青年から豊かな日本にも差別があるのかと聞かれた。400年前から続く部落差別により今でもなお差別を受ける状況が続いている。80年ほど前より運動がはじまった。日々の暮らしの中で教育闘争などをしてきた。女性の声はなかなか取り上げられず、やっと出てきたのは10年ほど前から。
- 私は6月にダリット女性との交流を通じて複合差別という視点を持つことの大切さを知った。ダリット女性が受けている被害が部落と似ていることに気づいた。教育、結婚などで差別されるうえ、「女に教育はいらぬ」という考えが多くある。日々の仕事の後の家事、望まぬ性交、けんか。
- 私の母も貧しかったために教育を受けられず、また結婚してからも夫婦喧嘩が絶えなかった。「女が何を言う！」と暴行していた。差別はより弱いものに転嫁され、より厳しいものになっていく。まだ闘いは終わらず、具体的に言っていく必要がある。ただし、日本では、複合差別の認識がない。男女平等に関する法はあっても、マイノリティの実態が反映されているものとは思わない。ほかの女性と交流して、さらに複合差別という視点からこの問題にとりこんでいきたい。世界会議に複合差別の視点を。

質疑応答

「人種、階級、年齢・・・などをこえてどう女性の連帯を作っていくのか？」

- スリランカ：とにかく連帯が必要。みんなどこでも一緒なのだがグローバル化の影響を受けている。先進国の日本でもまだ差別はある。
- 南アフリカ：それぞれニーズは違う。ただ、読み書きができる人がいて、読み書きができない人がいる。読み書きができるほうが読み書きを代わりにする、という協力はある。同じクラス、同じコミュニティでは一緒にできる。優先順位が違ってくる。必要なのはコミュニティのエンパワーと精神的な強さを持つこと。
- インド：マドゥライでは、ダリット差別はないとして女性は取り上げないが、女性間でのダリット差別がある。女性団体はそれを認めず無視しながらダリット差別が現実に存在するのを見るのでショックだ。
- 部落：運動をはじめるとき、自分の経験を出し合って、取り組みをすれば分かり合える。
- 香港：アフターマティブ・アクションは政治的にマイノリティ女性を進展させる政策だと思う。
- 部落：部落差別の歴史の中で「ノー」といえない状況の中で、我慢することを美学のように思ってきた。解放の中で女性差別の問題を叫ぶことで女性が「ノー」をいえることが大切だ。まだまだ日本の中で男性優位の状況があって、「嫁入り」「女性禁制」などがある。女性が変わればいいという考え方から脱却するべき。
- 日本人女性：東アジアの女性運動の中で女性運動はマジョリティに支配されていることも分かった。

だから部落解放同盟などの女性の取り組み、北京などでの取り組みは成功だと思う。もっと地域レベルで女性が手をつなぎあうことが必要だ。

- ・ ダリット女性：この世界会議でカーストがいかにひどいものかを言っているのにインド政府は聞かない。国際社会でカーストについて言うのは恥じだと言われてきたが逆である。

「女性に対する暴力が増えていること責任は？男性に対しては？」

- ・ 日本人男性：日本では男はフェミニストになるとほかの男から批判を受ける。人身売買と慰安婦の問題などにマイノリティグループの男性をはじめもっと男性がかかわっていくことが大事だ。男にもたらず社会からの厳しい差別があるが、差別の痛みや苦しみを分かっているから人のあたたかさも分かるはず。
- ・ 黒人男性：男性は、行動様式を制御される。教育を求められる。このような問題を考えるには歴史を考える必要がある。何で差別するのかルーツを直視する必要がある。

提言の採択：ニマルカ・フェルナンド

提言を参加者で採択し、2005年までのネットワークの構築を確認した。

「職業と門地(世系)に基づく差別の世界的な撤廃に向けて」～部落(日本)とダリット(「アウトカースト」、インド・ネパール)からの提起

反差別国際運動国際事務局・小野山 亮

日時：8月29日

主催：反差別国際運動、部落解放同盟、タミル・ナドゥ女性フォーラム

国連反人種主義・差別撤廃世界会議に先立つNGOフォーラムにおいて、8月29日、反差別国際運動は門地(世系)に基づく差別に関するワークショップを開催した。門地に基づく差別はインドのダリット(カースト制度下の「不可触民」、日本の部落に対する差別がその典型であるが、アフリカにも存在すると言われており、今回の世界会議で国際社会のとりくみが問われることとなった。

反差別国際運動はこの会議に向けて部落解放同盟、タミル・ナドゥ女性フォーラムとともに、ダリット差別の調査、部落・ダリット差別に関するパネル展、ダリット女性と日本のマイノリティの交流を行ってきた。

今回のワークショップでは、日本の部落差別、インド・ネパールのダリット差別を扱うことで、この問題が大きく取り上げられているインドのダリット差別にかぎられない世界的な問題であることを強調することに主眼をおいた。

ワークショップには日本、インド、ネパールほか約50人ほどが参加、同時にパネル展も行った。

パネリストの発言要旨は以下の通り。なお、司会はIMADRの顧問で「ダリット連帯プログラム」(インド)のバグワン・ダスが務めた。

< 開会挨拶 >

- ・ 組坂繁之（部落解放同盟）

世界会議の重要性を強調。部落とダリットの連帯の発展の決意。

< パネル >

- ・ 友永健三（部落解放・人権研究所）

世界会議における門地差別の扱われ方について。この問題が起草過程の中でどのように扱われてきたかを解説。

- ・ 谷元昭信（部落解放同盟）

日本における部落差別の歴史、現状、課題など、部落問題の概説。

- ・ ブルナド・ファティマ・ナティソン（タミル・ナドゥ女性フォーラム/農村教育開発協会（SRED）
- インド）

インドにおけるダリット差別の概説。

- ・ ドゥルガ・ゾブ（ダリット NGO 連合/フェミニストダリット組織代表 ネパール）

ネパールにおけるダリット差別の概説。

- ・ 山本義彦（部落解放同盟）

差別のないまちづくり。人権のまちづくりについて。自身の経験と今後の課題。

- ・ 坂根政代（鳥取県人権情報センター）

複合差別、マイノリティ内の女性差別について自身の経験とダリットとの交流

質疑では部落問題の具体的な説明を求める質問が出され、またダリットの運動についての討議がなされた。とりわけ後者においては運動体の分裂、資金が一部の団体に偏っている問題が取り上げられた。政府の政策にも一定の評価をなすべきとの声も上がった。これに対して、ダリットに対する厳しい差別の問題をまず直視すべきだという反論があった。

この問題に関する国際的な意識喚起が図れたこと、部落とダリットの交流が行えた部分は成果であった。質疑の後、世界会議、NGO フォーラム、国連機関、政府、メディア、市民へのこの問題に関するとりくみを求めた宣言を採択した。

門地差別をめぐる攻防

今回の国連反人種主義・差別撤廃世界会議において、門地に基づく差別の問題は主要な争点の一つとなった。この差別は「人種」に基づく差別にはあたらない、というインド政府の強硬な姿勢のためである。しかしこの差別は人種差別撤廃条約でも定義され、禁じられている「人種」差別の一つであ

る。

NGO フォーラムでの取り組み

政府間の本会議に先立つ NGO フォーラムにおいてこの問題は大きくクローズアップされた。NGO の活動の中心となっているのが、国際ダリット連帯ネットワーク(International Dalit Solidarity Network, IDSN)というネットワークである。これはインドの全国ダリット人権キャンペーンというネットワーク組織に、更に国際的に著名なアムネスティ・インターナショナル、ヒューマンライツ・ウォッチ等が参加して構成される形をとっており、IMADR、日本からは部落解放同盟もこれに加わっている。

このネットワーク及び構成メンバーによって被害者や専門家を招いた多くのワークショップ・デモ・太鼓の演奏などの文化プログラムといった様々な活動が様々な活動が行われた。IMADR もメンバーである部落解放同盟・タミル・ブドウ女性フォーラム(インド)と共にワークショップ及びパネル展を行った。

NGO フォーラムでは宣言・行動計画案ともにこの問題について取り上げられており、この問題が国際社会をあげて取り組むべき深刻な問題であることが明確になっている。

NGO 間の議論

NGO 間で討議の対象になったのは、問題に言及する際にカーストという言葉を使用するか、それとも「職業及び門地に基づく差別」という一般的な言葉を使用するかである。そして部落差別というように他の地域の問題にも言及するかどうかに関しても議論された。

一部のインドの NGO は「カースト」という言葉を明確に使用し、自国の問題を浮き立たせようとする立場をとっていた。しかしこの問題は世界的な問題であり、「職業及び門地に基づく差別」という一般的な表現を用いる一方、特にカースト(あるいはダリット)が言及され、かつ部落問題の両方が宣言、行動計画案の双方に入れられることとなった。

政府間会議の攻防・ロビーイング

政府間の本会議ではインドとアメリカ政府の強い抵抗と NGO によるロビーイングの激しい攻防が続いている。

この問題を扱ったパラグラフはこの問題に対処するための一定の措置を政府に促すもので、スイス政府提案により行動計画案に含まれていた。

ところが政府間会議での行動計画案審議の際にスイス政府がこの提案を取り下げることとなった。ここにはインド政府からの圧力があつた模様である。このことをあらかじめ知ることとなった NGO はこれに素早く対応し、各国政府代表他へこのパラグラフを残す提案をするよう働きかけを行い、こ

の結果 10ヶ国弱の政府が支持を表明することとなった。インド政府はこれに反対する立場をとったため、現在このパラグラフはかっこがついた状態となり、今後の審議を待つ状態となっている。

NGO 側は引き続き諸政府にパラグラフ支持を呼びかけており、EU・中南米・アフリカ諸国が肯定的な態度を示している。インド政府の影響力が強いアジア諸国にも支持を呼びかけていく予定である。なおいくつかの政府は全体会議でのそれぞれの声明及び、門地差別を非難する発言を行ってる。

IMADR は部落解放同盟と共に日本政府への働きかけの役割を担っているが、日本政府はこの問題が取り上げられることに反対しないが、積極的に提案をしたり支持を求めていくことはしない、という消極的な姿勢をとっており、非常に残念である。

部落差別への一定の取り組みをしてきたことをむしろ示し、日本政府が国際社会を引っ張っていくような意気込みを期待したい。ロビーイングを通じて国際政治のポリティクスと NGO のエネルギーを肌で感じた。NGO 走る!